昭和４０年８月１日発行　夷隅町新聞

学校物語（国吉小の巻6）

ーキツネの報恩（下）ー

余木令一

ケモノは今更いう必要もないが山野を荒らし、田畑の作物を盗すみ、時には人畜にまで被害をおよぼすのがその習性である。人間さまから「神の使い」としてあがめられ、おそたられるキツネだからとてその例外をなすものではない。しかしここに（す）くつたキツネの一族は、畜生ながらもいたくその恩義を感じたらしい。

それ以来ここの部落にたいしては少しの悪るさもせず、その生存に必要な物資をさがしもとめるときは、わざわざ遠くの部落にまで行つて目的をはたしたという。つまり舟岡の他の地区ではキツネに荒らされた痕跡がしばしばみうけられるのに、ここだけはその厄から全く免かれたというのである。

人を、動物を、たぶらかす以外に能のなさそうなケモノとおもわれ勝ちなキツネに、このような、けなげな行動が人間の思考の上からもはたして可能なのだろうか。

しかし、むかしのシナの本の中にキツネに関する良い性格の面を伝えているのがある。すなわちキツネはたとえどこで死のうとも、そのときは必らず自分がもと　んでいた地に頭を向けるという。このことは、キツネはおのれのふるさとを決して忘れないという、いわば望郷の念が人一倍、いなケモノ強いものであることの意味と解すべきであろう。しかりとすれば、これはまた報恩の心と一脈相通ずるものがあると考えられる。シナの古書を引用するまでもなく、日本にも有名な伝説が残されている。歌舞伎芝居でおなじみの「葛の葉、子別れ」は歌舞伎愛好者ならば誰もが知つているキツネの報　悲恋物語である。

さもあらばあれ、舟岡の人びとに対するこのキツネの心情にはいじらしいものがあることを大いに感じさせられるのである。もちろん、この話そのものは、いわゆる口碑であり、伝説である。そんな事実が実際にあつたのかどうかは別に問うところではない。またこの伝承された一編の美しい（？）ものがたりがどんな意味をもつものであるのかも、実はここでは考えてみる必要はない。

唯た、ここ舟岡の台がキツネまでも　むほどの樹木鬱蒼の山丘で五十年前のそのむかしでも、旧校歌の文句にある「常磐木茂ける」という形容が、すこしもオーバーな言いあらわしかたではなかつたということの、ある程度の証明になり得ればいいとしよう。

（つづく）